アメリカ合衆国シカゴにおける教育事情

前シカゴ双葉会日本語学校全日校　教諭
福島県福島市立鎌田小学校　教諭　橋　本　　健

キーワード：在外教育施設、シカゴ、教育事情、現地校視察

１．はじめに

今回の海外研修派遣の機会を活かし、アメリカにおける教育事情を調べることで、海外の視点から見た日本の教育を見つめ直し、日本の教育や文化の良さを改めて確認することができると考え、本テーマを設定した。

２．シカゴについて

（１）シカゴ市

シカゴは、アメリカ中西部のイリノイ州にあり、中西部最大の都市でもある。町の東側にはアメリカ五大湖のひとつであるミシガン湖が広がっている。緯度は日本の函館とほぼ同じになるため、冬場はかなり気温が下がる。シカゴの人口は約283万人で在留邦人は、約8,500人である。

（２）シカゴ日本人学校

シカゴ中心部から、北西に約48km離れたアーリントンハイツ市にある。アーリントンハイツ市周辺には、現在多くの日本人が在留している。校舎は、アーリントンハイツ市が所有する建物を借用しているが、設置団体であるシカゴ日本商工会議所は、シカゴ日本人学校としてだけなくシカゴ補習授業校としても運営しており、平日は全日校、土曜日は補習校として使用している。在籍児童生徒数（小中学生）は全日校が約160名、補習校が約400名と倍以上に達している。子どもを現地校に通わせて英語に親しませ、週に１回土曜日に補習校で、日本の教育を維持している家庭が多い。

３．アメリカの教育システム

（１）制度

アメリカの教育行政は、連邦政府ではなく、各州に委ねられている。州教育省・教育委員会の下には郡教育局、その下に学校区がある。日本と異なり、学校区の裁量で決定できる範囲は広く、使用する教科書やカリキュラム、始業日、終業日、休日なども定められる。小学校から高校までの学制についても学校区ごとに異なる。学期も２学期制のところと３学期制のところがある。成績表をもらう時期も学校区ごとに異なる。アメリカの義務教育は小学校１年生からではなく、日本の幼稚園年長に相当する歳から始まる。また、年度開始が９月スタートであるため、日本の学校から編入する場合はずれが生じることがある。学校内では分業制が導入されており、管理職は、別枠で採用され生徒指導や保護者の対応などを担うため、教師は、学習を教えることだけに専念することができる。日本の学校から見ると、学習塾のような感覚に近いものを感じる。

（２）選択

保護者は、公立、私立の他にホームスクールの選択もできる。学校に通わずに自分の家で学習を教える家庭もある。ある中学校で、小学校に通いながら数学だけ中学校に通う子どもを見かけたことがあり、飛び級も普通にあることである。一人ひとりに対応した支援やカリキュラムの提供がとても充実しており、その分、職員数も多く配置されている。プレップスクールという、高度な教育内容の私立学校は、８年生から入ることができ、進学のための準備教育を行う有名大学進学のための寄宿制の私立中学・高等学校をいう。

（３）教員採用

教師になるには、国家試験にあたるものを受ける。教員採用試験ではなく、各公立学校が「小学２年生の担任

がほしい」というような求人を出すことになる。退勤後に大学院に行って勉強をしたり、研修を受けたりするというプログラムも充実している。学校区での研修もよくあり、教員の仕事は子どもの成績を上げることで、それが給与に直結している。

４．アメリカの教育環境

（１）子どもの接し方

アメリカでは、とても子どもを大事にする風習がある。子どもを車に乗せたままで買い物をすると警察に捕まることやベビーシートに乗せていないと、買い物の間に警察を呼ばれ注意されることもある。兄弟げんかで、こぶしを振りかざすポーズをしていただけで、暴力事件とみなされ近所の人に通報され裁判所に呼ばれるということもある。村や州によっては門限もあり、13歳以上でも夜に子どもだけで出歩いていると警察に注意されることがある。シカゴでは平日20時30分、休日21時である。父親が叩くことも暴力とみなされるため、禁止されている。「親が叩くと、子どもも叩くようになる」という考えがあるためである。

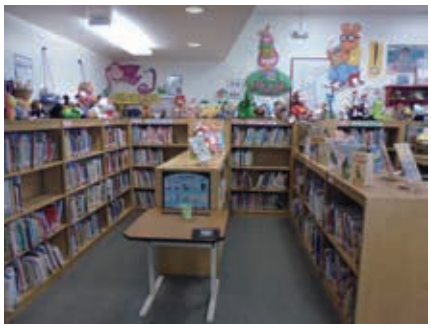
（２）教師と保護者の役割

アメリカでは親が教育のすべての主役である。親が高い固定資産税を払っている納税者なので、主導権を持っている。学校は強制することはできないので「こうしたらよい」と言うことしかできない。アメリカの教師は、基本的に「あなたたちが考えるのよ」というスタンスで、子どもがどう考えるかを大切にして教育している。教室内で教えることが多く、教育の技術者といえる。学校を出たところで、たばこを吸っている生徒がいても口を出せないし、日本のように生徒指導はしない。アメリカは裁判になることが多く、教師も同様なこともあり、子どもをけなさずにほめるだけである。アメリカでは、両親で子育てをする習慣がある。父親も一緒に子育てをし、子どもが学校でやっていることに関心を持ち、一緒に学ぶ姿が見られる。先生任せは日本式で、アメリカでは学校に要望するのではなく、ソーシャルワーカーを進められる。

５．現地校視察

（１）Dryden Elementary School

児童数は約500人で、1クラスは約20人である。60人の職員のうち約40人が教師である。美術、音楽、体育は専科で行っている。図書は、T.T.で行っている。職員会議は、月2回、始業前の45分間に行っている。グループ会議は、月1回行っている。学年ごとの会議は、毎週行っている。年4回は、子どもを登校させず1日会議の日（研究、ステイト、ディストリクト、学校）がある。リーダーシップチームで時間割を編成している。アメリカでも、いじめ問題はあるので児童の人間関係をよくするような取り組みを行っている。特に、幼稚園で遊び方や話し方、答え方のコミュニケーションや行儀などについて指導している。また、教師も同じ内容で研修し、家族にはソーシャルワーカーとコミュニケーションをとるようにしている。児童のことについては教師が保護者と対応するが、教師のことについては校長が対応し、Eメール、電話、ミーティング、専門家を交えたチームで対応することもある。学校の予算ではなく、ディストリクトの予算である。80～85％がTAXからで残りは政府からの補助になっている。したがって、税金が高い地区は、教育環境が充実しているということになる。


常に工夫されている図書室

（２）Whiteley Elementary School

日本でいうところの教育六法に基づいて、カリキュラムを作成している。小学校のメインは、読みと算数の2つ。主の教科書は決まっているが、それを使わなくても良い。月曜日から金曜日までの同じ時間割を使っている。先生は、今現在44州で採用している学習指導要領（Common Core Standard）を常に携帯している。オバマ大統領が、皆同じ基準で教育しようと呼びかけたことで2014年から大きく変わった。イリ

ノイ州は1996年から使用している。中学校は、全教科でCommon Core Standardを使用しているので、全教科の教科書が一応決められている。問題行動を起こす児童、暴れる、時差に苦しむ児童などには、落ち着く部屋が用意されている。スナックタイムがある。それは、脳科学上、その時間に何か口に入れたほうが脳のはたらきが良くなるという考えから導入されている。年に3回大きなテストがあり、年の初めと終わりに読解力を知るテストがある。日本でいう全国学力テストは、アメリカでPark Testといい小3～中3までが受ける。年1回のPark Test は、Common Core Standardを作っている国立教育研究所のような業者が作っている。アメリカは、しつけは家庭の仕事という意識があり、学習が学校の仕事という考え方である。アメリカは公立が1番という考え方が多く、塾はあまりない。管理職以外は、女性の先生が多い。スマートボードは6～7台ある。クロムブックも使用しており、日本では、日野市平山小、杉並区で使用している。全て、グーグルドライブのアカウントで管理している。English as a Second Languageの生徒には、1人1台タブレットを使わせ、常に翻訳ができるようにしている。算数は、小2～小6は一斉授業で行っており、飛び級もある。国語では今、説明文の読解が注目されている。話の内容を掴む練習を繰り返し行い、読みの方法を学ぶReadingストラテジーも行っている。本にはレベルがある。例えば、1の1だったら、1年生の1か月目という意味で、自分に合った本選びの指導は、1年生から始まる。8歳までにどの程度の知能があるかどうか、これから見込めるかどうかが決まるので、2年生の終わりに英才教育のクラスに行くかどうかをジャッジする。英才教育を受けると決まった子は、3年生からずっと英才教育が受けられる。欠席した場合、事務室から家に電話がある。理由を尋ねられ、登校しぶりの場合は、ソーシャルワーカーが担当する。10日間学校に来なかったら、不登校専門の管理局に連絡する。子どもを学校に行かせることが最優先なので、パトカーなども活用し、最終的には、hospitalと連携している学校のような施設か公立の学校かどちらかには必ず在籍するようにし、家にはおいておかないようにする。物事は学年団で決めることが多い。テスト（日本でいう単元のまとめのテスト）の前には、細かく目標や到達度などを書き込む。「尊敬すること、責任をもつこと、安全に過ごすこと」この3つのどれかにはみだしたら、イエロー（マイナー）となる。マイナーの判断は、担任が行い、肩をポンとたたいて「イエローだよ」と言われたらアウトになる。1か月に3回マイナーをもらったらレッド（メジャー）になる。レッド（メジャー）になったら、校長室で校長先生と話し合い、校長先生が家に電話することになる。

6．アメリカの教育のよさ

（1）コンピュータ機器の充実

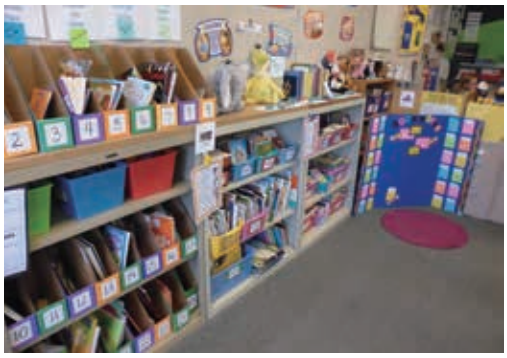
現地校視察に行くと、どの学校でもコンピュータ機器が整備されていると感じる。どの教室にもパソコンとプロジェクター、投影機が設置されていてホワイトボードに映し出して授業を行っている。その分、日本のようなノート指導はあまり行っていない。また、タブレットも全員が使用できる数があり、子どもたちも操作に慣れている。機器の管理には、専門のスタッフが配置されており、常にメンテナンスされている。固定資産税がそのまま教育費に充てられるので、裕福な地区は学校施設もとても充実している。日本国内において、同水準のコンピュータ環境を整えようとするなら、やはり機器のメンテナンスを専門に行うスタッフの確保も必要になってくると思われる。

（2）自由な雰囲気の学校内

アメリカの現地校に行ってまず思うことは、その自由な雰囲気である。教師はコーヒーを片手に授業をしている様子も見られる。服装も自由だが、姿勢、学用品等もそれぞれである。授業中に机の上に乗って考えている児童もいれば、お菓子を食べながら考えている児童もいる。人種も様々なので、自然とそういう雰囲気が出来上がるのかもしれない。日本は、同じ民族の国なので、外国人や異質のもの

明るい色使いの掲示版

に対して、自分たちと違うという意識を持ちやすいのかもしれない。アメリカの学校は自由な雰囲気ではあるが、教師の話は静かに聞く習慣はしっかりしているし、家庭学習の量もとても多い。お互いの価値観をそれぞれ尊重し、認める合う素地があるといえる。



教室後方のロッカーの使い方

（3）家庭と学校の役割の明確化

アメリカの教師は、教えることに責任を持って仕事をする。つまり、生活指導は学校でなく家庭でするものであるという考え方である。家庭学習をやってこない場合も、学校で指導するのではなく、家庭に連絡して保護者に対応してもらうということである。アメリカの教師は、日本の教師に比べ残業をすることが少ない。これは、家庭を大事にするというアメリカ人の考え方からきているのかもしれない。

7．おわりに

3年間の海外研修を通して、日本にいたままでは気付くことのできなかったことを体験でき、視野を広げることができた。アメリカの教育を実際に見ることで、その違いを直に感じ、また日本の教育のよさも改めて再認識することができた。国は違っても、子どもを思う気持ちは同じである。そこに、国の成り立ちや文化・風習の違い、歴史など様々な要因でそれぞれの国の教育事情が違ってくる。今回の経験を日本の子ども達のために生かしていきたいと思う。そして、お互いを認め合い、お互いの国を認め合えるような視野の広い子どもたちを育てていけるよう邁進していきたい。